

長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査

1994

長野県飯田市教育委員会

例 言

1. 本書は長野県飯田市代田に所在する代田山狐塚古墳（しろたやまきつねづかこふん）の測量調査報告書である。
2. 調査は、長野県史跡指定に先立ち飯田市教育委員会から長野県教育委員会を通じて筑波大学歴史・人類学系考古学研究室に依頼し、平成5年7月16日から20日まで実施した。
3. 本書は平成6（1994）年3月発行の『筑波大学 先史学・考古学研究』第5号 57～68頁に掲載された報告文を再録したものである。
4. 調査参加者氏名は文末にまとめて記した。
5. 本書の執筆は、筑波大学大学院歴史・人類学研究科の田中裕が担当し、早野浩二が協力した。分担の詳細は文末にまとめて記した。
6. 本書に関連する諸記録は、筑波大学が保管している。

長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査

1. はじめに

伊那谷は長野県南部に位置し、諏訪湖から流れる天竜川に沿った盆地である。この伊那谷の南端に当たる飯田・下伊那地域には29基もの前方後円墳が分布しており¹⁾、大型古墳の密集地域として知られてきた。とくに当地域の重要性が広く認識されるようになったのは大正14(1925)年の鳥居龍藏・市村成人らによる『下伊那の先史及原始時代』一図版と、戦後の昭和30(1955)年に刊行された『下伊那史』第2巻、第3巻によるところが大きい。以降、当地域では前期古墳が認められない一方、大型の横穴式石室をもつ後期の前方後円墳が集中する点が注目され、これまでも幾多の研究が行われてきたほか(白石 1986 a,b)、前・中期の前方後円墳が集中する長野県北部の善光寺平との対比や(大塚考古学研究会 1964)、武蔵国における古墳群の動態との比較が試みられてきた(岩崎 1984, 棚原 1984)。

代田山狐塚(2号)古墳にはじめて注目したのは『下伊那史』第2巻においてであった。それによると全長41.9mの前方後円墳とされ、急傾斜地に立地する点を挙げて「特異な存在として注目せらる」としている。しかし年代などについては触れられていない。考証の決め手を欠いた本古墳が注目されることは、その後あまりなかったようである。

飯田市教育委員会が近年行っている遺跡の詳細分布調査により、帆立貝式古墳の存在が確認されるとともに本古墳についても前方後方墳であるという可能性が指摘された。(小林正春 1992)。

この指摘を承けて、現地踏査によりその重要性を認識した中司照世らは本古墳の測量図を作成し、前方後方墳として発表した(中司・田中・白井・長沼 1992)。全長は約46m、後方部は約26mの正方形に復元できるとしており、主体部の存在にも初めて触れている。そしてこれまで後期に前方後円墳が集中することが強調されてきた下伊那地域においても、美濃・近江北部や信濃北部などと同様に時期を異にせず、前方後方墳に始まり前方後円墳や帆立貝式古墳へ引き継がれるという継続的な首長墓の築造が行われた可能性を指摘した。

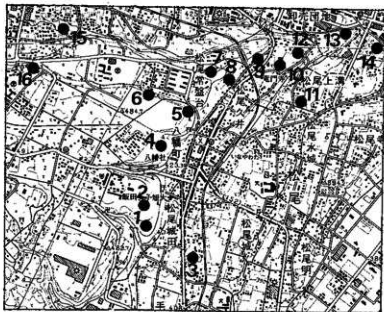
このような研究の動向の中で本古墳の重要性が認識され、長野県史跡に指定して保存を図ることが計画された。しかし、既存の測量図は中司らも認めるように、不十分な点があり、規模や細部の形状等に不明確な部分があるので、本古墳の現状を把握し、指定に先立つ基本資料を得るためにより詳細な調査を実施することが必要となった。今回の測量調査は長野県教育委員会文化課からの依頼を受け、筑波大学の考古学実習の一貫として平成5年7月16日から20日ま

で行われた。

なお、調査にあたっては、長野県教育委員会、飯田市教育委員会、および地主の方々にはひとかたならぬ協力を賜ったほか、とくに小林正春氏には準備から報告に至るまで諸事万端に亘ってお世話いただいた。また岩崎卓也氏には現地についてご指導を得たほか、本稿作成の過程で中司照世氏に御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

2. 立地・現状

代田山孤塚古墳は飯田市松尾代田1403-71に所在する。本古墳は天竜川中流域右岸の河岸段丘の端部に立地し、南南東に向かって傾斜する標高約460mの斜面に築造されている。『下伊那史』によると、北西には東西径22.3m、南北径19.6mの円墳である代田山1号墳が所在していたとされるが、現在は確認できない。また飯田市教育委員会による最近の遺跡の詳細分布調査では、本古墳の北方約120m付近で円墳1基が確認されているが、飯田女子短期大学の校地造成の際、墳丘の半分が削平されており、詳細は不明である。いずれにしても本古墳の周辺には



第1図 代田山孤塚古墳の位置 (1:25000)

1. 代田山孤塚古墳
2. 代田山1号墳
3. 代田獅子塚古墳
4. 八幡山古墳
5. 妙見山古墳
6. 物見塚古墳
7. 御射山獅子塚古墳
8. 茶柄山3・4号墳
9. おかん塚古墳
10. 上湊天神塚古墳
11. 水佐代獅子塚古墳
12. 鯉塚古墳
13. 羽場獅子塚古墳
14. 妙前大塚古墳
15. 鞍骨古墳
16. 物見塚古墳

とくに目立った規模の古墳は見当らない。

墳丘及びその周辺一帯は、後世の植林事業によってヒノキ林となっている。そのため墳丘には崩壊部分が多く見られ、やや旧状を損なっているものの、墳丘の北側及び西側は比較的旧状をよく残している。

3. 墳丘測量調査

今回の測量調査の結果、本古墳は主軸を真北とのなす角で $N17^{\circ}E$ にとる前方後方墳であるという結果が得られた(第2図)。

墳丘の西側及び北側には、幅約6m前後の周溝が巡っているが、深さは西側で約80cm、北側は西側ほど顕著でなく約60cmである。これに対し、東側と南側では標高461.00mの等高線付近で幅約4mの緩斜面があり、さらにその周辺部は崖になっている。後方部は各辺の等高線が直線的に巡ることから方形であると考えられ、本古墳の墳形を前方後方墳として、以下により墳形の復原を試みた。

本古墳の墳裾は西側では比較的明瞭であるが、東側では封土の崩壊、流出のため墳裾が不明瞭な部分もある。そこで西側の墳裾を換り所とし、その方向から主軸方向を求め、東側で観察された墳裾を参考にしながら左右対称形に復原すると、後方部は正方形となる。前方部先端は封土の流出がとくに著しく、墳裾の位置が把握できる状況にはなかった。このため、前方部先端の両側部を、等高線の屈曲点を参考にしながら、東側では標高461.25m付近、西側では標高460.25m付近に求め、両点を直線で結び前方部先端とした。ただし、現地での観察でも、今回の測量図においても、前方部がより大きい可能性や、前端部が扇形となる可能性がまったく否定できるものではないことは断っておく。また前方部の東側の墳裾も不明瞭であったので、後方部と同様に比較的明瞭な前方部西側の墳裾を基準として、左右対称形に復原しておく。これによれば、現地での観察から得られた墳裾は合致するものの、後述する主体部と平坦面の位置が中心より西に偏ってしまう結果となる。

一方、主体部と墳頂平坦面の位置を重視する立場に立つならば、それを中心に左右対称形に復原することも可能であるかと思われる。この場合、東側の墳裾は標高462.00m付近に求められ、後方部は長方形、前方部は強くくびれるかたちに復原される。しかし、前方部、後方部とも墳裾の向きや位置が一致しないことから、この復原案は採用しないことにする。

以上のような墳丘の復原を試みた結果は、第4図に示す通りである。全長は約42.0m、後方部が正方形の場合の一辺の長さは約28.0m、後方部墳頂平坦面の長さ(南北)は約14.0m、同幅(東西)約13.0m、くびれ部幅は約11.3m、前方部の長さは約14.0m、同先端幅約19.0m、前方部墳頂平坦面の長さは約8.8m、同幅約6.4mを測る²⁾。

後方部の最高点の標高は466.320m、築造面からの比高は北西隅で約2.87mを測り、集落から見上げることになる墳丘の東側では約5.30mに達する。前方部平坦面端部の標高は463.357m、築造面からの比高は約1.50mである。後方部と前方部の比高は約3mであるが、

本古墳が斜面に築造されたことが反映されて、前方部の位置はかなり低いという印象を与える。このように、本古墳は後方部長の二分の一という比較的短く、かつ低い前方部がとりつくものと考えられる。

測量調査の際、部分的なボーリング調査を行なった結果、後方部平坦面のほぼ中央、深さ約30cmのところで、2条の石列からなる構築物が確認された。付近には盗掘坑らしきものが見当らず、もし主体部が良好に遺存しているとすれば、この構築物は天井石を欠いた竪穴式石室の可能性³⁾がある。しかしその両小口は木の根の下にあたるため確認できなかった。あえて後方部平坦面のほぼ中央に位置すると前置きしたのは、墳丘の復原を試みた際、主軸が埋葬施設上を通らないと判断したからである。

なお今回の調査では、本古墳にともなう埴輪などの遺物は採集できなかった。また、本古墳の立地する地山には礫が多く含まれているにもかかわらず、墳丘上にはほとんど石が認められないことから、葺石はなかったものと思われる。

4. 前方後方墳とその築造時期

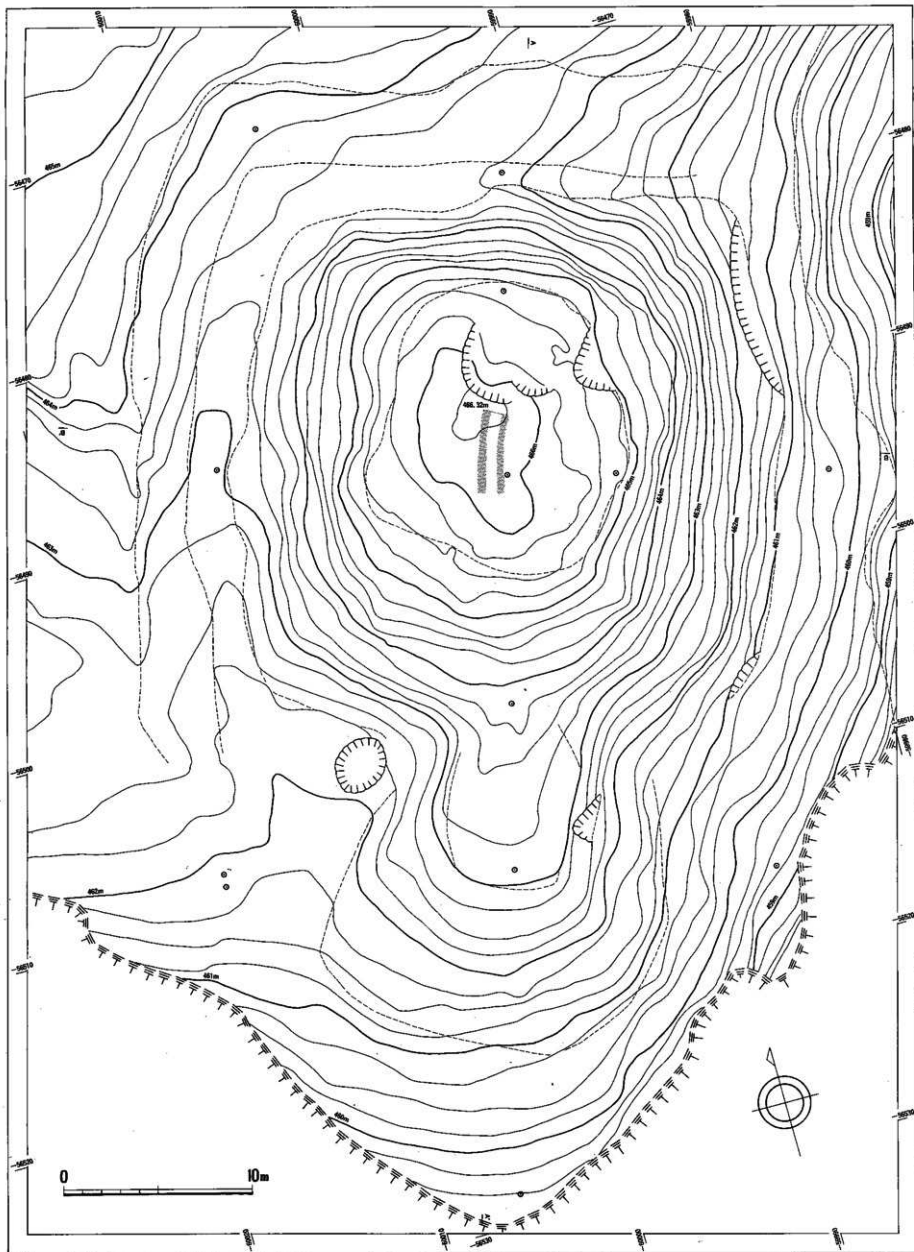
前方後方墳が注目されるようになって半世紀近くになるが、その研究史はすでに茂木によって整理されているとおりである(茂木 1974)。近年では、濃尾平野での前方後方墳の確認が相次いだことを受けて、墳形の細別を中心に急速に議論が深まりつつある(田中 1986; 赤塚 1988, 1992)。

一般的には、出雲、那須などの一部の地域を除けば、前方後方墳は前期に多く、中期や後期には数少ないということが言われ、本古墳も前期古墳とする可能性が高いと思われるが⁴⁾、最近の議論を踏まえればもう少し詳しい検討が必要かと思われる。

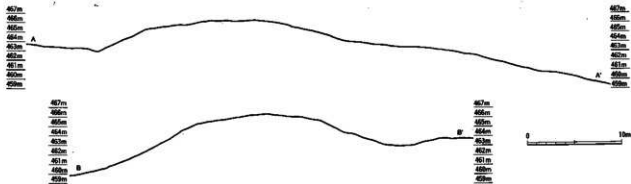
中部地方において成果をあげている赤塚次郎の整理を借用すると、前方後方墳はその形態から「畿内型」、「瀬戸内型」、「北陸型」および「東海型」の4つに大きく分類できるという。そのうち後方部が主軸に対し横長の長方形となる「北陸型」、楕形に開く長い前方部をもつ「瀬戸内型」、直線的で幅広の前方部をもつ「畿内型」のいずれもが本古墳の形態に合致せず、従って消極的ながら「東海型」ということになる。

ただし、注意すべき点は、ほかの3形態を除くものの総称が「東海型」なのであって、赤塚自身が認めるように、多様性が見られるということである。また、ほかの「地域的な特色ある」3形態については、当該地域に異なる形態も存在していて、しかも該当する形態が果たして優勢かどうかは一概に言えず、そこに理論的な落とし穴がないかが危惧される。とはいえ、「東海型」に限って言えば、今のところ濃尾平野でそれ以外の前方後方墳が認められず、そして最も早くこの形態が成立していたという指摘に誤りがない限り、ある程度の妥当性は認めてよい。伊那谷と美濃は接しているので、濃尾平野と同形態の前方後方墳が存在するのは肯定し得ることである。

「東海型」のなかでは、後方部が正方形のものより縦長の長方形となるものが、また、前方



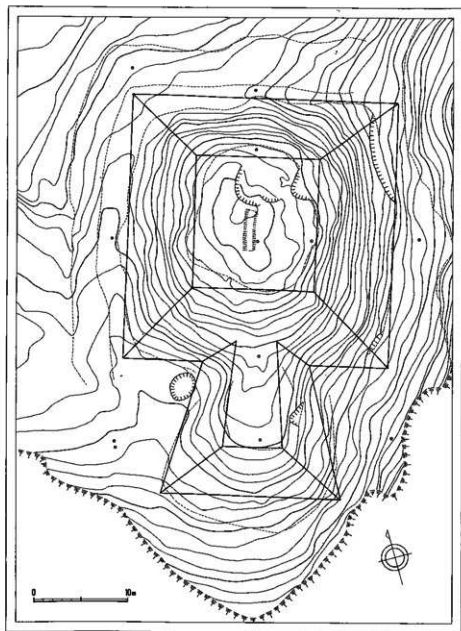
第2図 代田山塚家古墳の測量図 (S=1/200)



第3図 墳丘断面图 (S=1/400)

部前端幅が比較的狭いものより、それが後方部幅に匹敵するほど広いものが後出するという。前方部の長さについては、長野県松本市弘法山古墳を例に挙げ、上記2点の変化が起こる以前から後方部長と同程度の前方部長をもつ古墳が出現しているとする。

本古墳の後方部は正方形と縦長長方形のどちらかに復元できる。また前方部はかなり前端に



第4図 復原案 (S=1/400)

向かって開くが、後方部幅に匹敵する程ではない。前方部の長さは後方部長の約半分と短い。赤塚の変遷観をそのまま適用すれば、復原の仕方によっては新しい要素があるものの、全体的には前期でも古い時期に出現する要素が人勢を占めることになる。いずれにせよ、中期や後期の前方後方墳がもっと長大で幅広の前方部をもつことが多い点を考えれば、本古墳の築造時期は古墳時代前期に確実に納まるものと考えられよう。竪穴系の埋葬施設が想定される点もこれと矛盾しない。

5. 伊那谷における本古墳の位置づけ

伊那谷において前方後方墳の存在が確認されたことの意義については、中司らがすでに指摘している。ここでは周辺古墳との関係のみについて注目すべき二・三の点を述べておく。

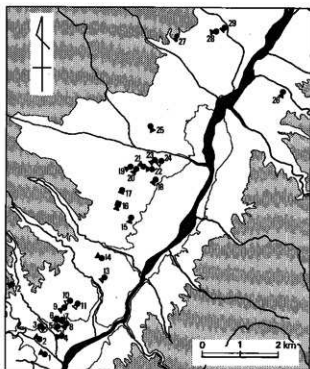
一般に古墳群の設定や墓域を推定する手がかりとしてよく用いられるのは、主軸の方向と立地、そして古墳の分布状況である。

まず本古墳や伊那谷の前方後円墳の多くが、北を基調として主軸を向ける点に目を向けてみよう。これらの古墳を調べてみるとやや東に振れていて、古墳ごとにその度合が微妙に異なっている。各古墳の位置を地図上で見ると(第5図)、ほぼ天竜川と平行していることに気付くであろう⁵⁾。谷の向きと言い換えてもよい。このように谷の方向に主軸をとる例は伊那谷に限らず認められるようである⁶⁾。その意味に限っては本古墳と他の前方後円墳との間に共通の観念が見て取れまいか。

一方、本古墳が急斜面に立地している点が特異な存在だとした指摘にも注意しておく必要がある。長野県内で大型古墳が集中するもう一つの地域、善光寺平周辺では前方後円墳、前方後方墳ともにほとんどが尾根の突端に位置する点で、伊那谷とは趣がまったく異なる。善光寺平においては、前方後円墳の主軸が例外なく主丘たる後円部を尾根の傾斜方向に向けて築かれているにもかかわらず、前方後方墳には前方部を傾斜方向に向ける例が認められ⁷⁾、飯山市勘介山古墳、長野市姫塚古墳などが挙げられる。後者の場合は同市川柳将軍塚古墳と同じ尾根上に位置するにもかかわらず主軸が逆位になる。松本盆地においても、唯一判明している松本市弘法山古墳は尾根の突端に位置し、前方部を傾斜方向に向けている。

伊那谷においては斜面と言わず、本古墳と同じ高位の段丘に立地する古墳すら少ない。全長30m以上のものでは、わずかに飯田市八幡山古墳、同市物見塚古墳が挙げられるのみである。本古墳に比較的近い八幡山古墳は帆立貝式古墳と認められ⁸⁾、中期古墳である公算が高く、物見塚古墳も中期古墳である⁹⁾。また両古墳の間には古墳時代前期から中期にかけて24基以上もの方形周溝墓が密集する八幡原遺跡がある¹⁰⁾とするとこの高位の段丘は古墳時代の比較的早い時期に墓域として利用されていた可能性が、注目されよう。

こうしてみると、突き出た尾根などがあまり見られない伊那谷において、本古墳のみがかなり傾斜のある高位の段丘の角に立地する点、やはり前方部が傾斜方向を向いている点など、他の前方後円墳と異なる意識的な選地を想起させられるものがある。特異な存在という指摘もあ



1. 正清寺古墳 2. 御堂堂古墳
3. 馬背塚古墳 4. 金山二子塚古墳
5. 塚原鏡塚古墳 6. 塚原3号墳
7. 塚原鏡塚古墳 8. 塚原二子塚古墳
9. 兼清塚古墳 10. 桐林大塚古墳
11. 丸山古墳 12. 一ツ塚古墳
13. 権現堂1号墳 14. 塚越1号墳
15. 代田獅子塚古墳 16. 代田山狐塚古墳
17. 八幡山古墳 18. 水佐代獅子塚古墳
19. 御射山獅子塚古墳 20. 茶柄山3号墳
21. おかん塚古墳 22. 上溝天神塚古墳
23. 姫塚古墳 24. 羽塚獅子塚古墳
25. 飯割雲影寺古墳 26. 郭1号墳
27. 北本城古墳 28. 高岡1号墳
29. 新井原大塚古墳

第5図 伊那谷南部前方後円(方)墳分布図

(詳細分布調査により確認された帆立貝式古墳を含む。

白抜は前方部が削平された古墳を示す。)

ながち否定しがたいのではなからうか。

ところで、本古墳に最も近接する前方後円墳、代田獅子塚古墳について少しふれておくと、本古墳より低位の段丘上の端部ではあるが比較的平坦な場所に築かれている。同じ段丘上には数百m程北に後期の前方後円墳が集中して分布し、本古墳とはかなり立地条件が違うことが注目される。また墳丘はかなり変形を受けているものの、後円部の西側上部には葎石がよく残っており、円形をしているのがわかる。前方後方墳であるとの白井久美子の見解もあるが(中川ほか 1992)、現状では前方後円墳と考える設楽博己らの見解が妥当と思われる(設楽・松尾 1981)。採集されている埴輪は、白井も認めるように新井原2号墳や郭5号墳などの例に近く、前期にまで遡らせるのは困難と思われるが、いずれにせよ詳細な検討はまたの機会としたい。

伊那谷全体を見回してみると、現在知られている前方後円墳のなかには前期の築造と想定しうるものは存在しない。今後発見されるとすれば、発掘によってであろう。しかし本古墳に続く古墳が想定しえない現状では、果たして前方後円墳に代表される首長墓が継続して築かれたかどうか即断しえない。松本盆地のように弘法山古墳の後には一基として前方後円墳が確認されていない地域もあるので¹¹⁾、本古墳のみが突出して古く、いったん断絶した後改めて前方後円墳が築かれた可能性も考えられよう。ただし、注意したいのは、この場合も決して首長

墓がなかったということではなく、上田盆地のように方墳によって首長墓が跡付けられ、前方後円墳である上田市秋葉裏二子塚古墳が築かれるのは後期になってからという例もある。

それにしても、善光寺平に前期・中期の前方後円墳が集中してみられ、伊那谷では後期に集中していることは、動かしがたい事実である。このような現象は中司が指摘するように伊那谷に限ったことではないから、むしろ古墳時代研究にとって注目すべきことと言えよう。伊那谷が特殊な地域であるかはともかく、今後の研究のためにこのような現象を一層跡付けていく必要がある。また伊那谷においては近年中期古墳の資料が急増しており、古墳分布の形成過程をもう一度把握しなおす時期にきている。そのような作業のなかで上記の問題も徐々に解決されていくであろう。

6. まとめ

今回の調査により、伊那谷においては古墳時代前期に古墳造営が確実に始まっていたことを裏付ける結果となった意義は大きく、今後の研究にますます拍車をかけることになろう。しかしながら本稿で提示した墳形、規模および年代観はあくまでも現状から得られるものであり、おのずと限界がある。今後さらに精緻な情報を得るためには、発掘調査が必要となるであろう。特に主体部が想定される墳頂部には明らかな盗掘坑はみられず、良好に遺存している可能性もあり、注目される。一方前方部の裾の広がりには現状では確認しがたく、こうした現地表下に埋もれた遺構、遺物が明らかにされることでまた新たに狐塚古墳の位置づけがなされるはずである。それは今後機会を得てなされる課題といえよう。

なお現地調査と整理にあたっては筑波大学歴史・人類学系西野元・常木晃・滝沢誠諸先生方の指導のもとに、同大学院学生田中裕・日高慎・土器屋真理子、同学群学生早野浩二・鈴木浩文・小河原博志・齋藤しのぶ・坂本美穂・渡辺雅典・井関多美子が作業をおこなった。また本稿の執筆には、1・4・5・6を田中が、2・3を早野が分担し、全体を田中がまとめた。

- 1) 現在確認できるもので、便宜上これまで前方後円墳とされてきた本古墳および帆立貝式古墳を含めた。
- 2) 後方部を長方形として復原した場合の後方部の主軸方向の長さは約28.0m、同幅約26.0mを測る。
- 3) 東日本では壑穴式石室をもつ前方後方墳は今のところごく少数に限られ、その一例となる本古墳の性格が注目される。長野県内においては、松本市弘法山古墳での確認例が知られている一方で、本古墳と併せて測量調査を行なった飯山市勘介山古墳では、同様の構造物が確認されていない(日高ほか 1994)。今後、墳形の相違と併せて主体部の比較検討が重要課題となるであろう。
- 4) また長野県ですでに発掘されている前方後方墳は若干数にとどまるが、それを含めて中期ないし後期のものは報告されていない。

- 5) なお、おかん塚古墳、上清天神塚古墳、塚越1号墳、馬背塚古墳、御猿堂古墳などに例外が見られる。しかしこれらは横穴式石室を有する比較的新しい古墳であり、主体部の開口方向などの規制要素も考慮する必要がある。
- 6) 例えば福井県の若狭の前方後円墳は好例である。
- 7) 善光寺平の古墳の立地については丸山敏一郎が詳しく記録しており(丸山 1976)、これを受けて植松幸八が、越将軍塚古墳、舞鶴山2号墳、姫塚古墳、田野口大塚古墳の4古墳のみが平野に前方部を向けている、と指摘したことがある(植松 1986)。このうち越将軍塚古墳は現在円墳と認識されており、舞鶴山2号墳は明らかに後円部のほうが傾斜方向に築かれているので、前方後円墳で前方部を傾斜方向に向ける主軸を取るものは今のところ皆無である。
- 8) 最近の飯田市教育委員会による詳細遺跡分布調査によって確認された。
- 9) 径30mの円墳で、割竹形木棺を納めた粘土椽を主体部にもち、剣2振、壺7個、漆被膜が出土している。また、周溝からはTK73~TK216型式併行の須臾器、馬の歯、轡が出土している。飯田市教育委員会 1992『八幡原遺跡 物見塚古墳—飯田市立病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書』
- 10) 主体部の明らかなものは少ないが、古墳時代前期から中期の土器が出土している。また、7号方形周溝墓には葺石が貼りめぐらされ、本古墳との関係が目玉される。飯田市教育委員会 1992『八幡原遺跡—一般国道153号飯田バイパス(3工区)用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 11) 松本市桜ヶ丘古墳は帆立貝式古墳の可能性が指摘されているが(中司ほか 1992)、いずれにせよ、いわゆる前方後円墳は現在確認されていない。

参考文献

- 赤塚次郎 1988『東海の前方後方墳』『古代』86
- 赤塚次郎 1992『東海系のトレース』『古代文化』44-6
- 岩崎卓也 1984『後期古墳の築かれるころ』『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 植松幸八 1986『東海・中部地方の前方後方墳』『月刊 考古学ジャーナル』269
- 大塚考古学研究会 1964『長野県における古墳の地域的把握』『日本歴史論究』文藝堂銀行研究社
- 桐原 健 1984『東山道』における信濃』『列島の文化史』1
- 小林正春 1992『下伊那地区の遺跡』『科野における古墳出現期の現状と課題』長野県考古学会
- 設楽徳巳・松尾昌彦 1981『下伊那地方における前方後円墳の実測調査』『信濃』33-10
- 白石太一郎 1988 a『伊那谷の横穴式石室(一)』『信濃』40-7
- 白石太一郎 1988 b『伊那谷の横穴式石室(二)』『信濃』40-8
- 田中新史 1986『出現期古墳の理解と展望』『古代』77
- 中司照世・田中新史・白井久美子・長沼律期 1992『下伊那の前方後方墳』『土壌』2
- 日高 慎ほか 1994『勘介山古墳測量調査報告書』飯山市教育委員会(印刷中)
- 丸山敏一郎 1976『善光寺平の古墳立地について』『信濃』28-4
- 茂木雅博 1974『前方後方墳』雄山閣

長野県飯田市代田山孤塚古墳の測量調査

平成6年3月31日

発行 長野県飯田市上郷飯沼3145-1

飯田市教育委員会

印刷 茨城県つくば市天久保2-11-20

株式会社 イセブ

